

8ミリ映画「東濃ひのきと下呂営林署」の作成

下呂営林署 田口正吉

はじめに

下呂営林署は、昭和54年度から四半期に一度を目途に、定例出署日を利用して、外部講師を招き講演会を行っている。

54年10月。中日新聞萩原通信局白石氏を招いた。白石氏は「東濃ひのきは素晴らしい。しかし、私たちはあまり知らない。飛騨地方なのに“東濃ひのき”と呼ぶのも引かかる。お役所は宣伝がへただ」とのべた。

宣伝の専門家の見た目ではあるが、国有林のPRを、と口にする割に“何を”“どのように”宣伝するのか、当署としては明確でなかった。その点も含め、たしかに私たちの宣伝はへたである。

このことが引き金となって、それまで問題意識を持っていたが、具体性のなかった国有林のPRについて討論してみよう、ということが下呂営林署広報委員会で話題となり、55年3月、会議を開いた。

結論から言えば「何を、どのよう」にPRするか、「これだ」という結論にはならなかったが、懐ぐあいとも相談しながら、55年度は、

1. 古くなっている貯木場の看板を新しくし、公売日だけの文字も東濃ひのきのPRするもの書き換える。

(5月のはじめ、緑地に白字の“香りとつやの東濃ひのき”の看板が新装された)

2. 8ミリ映画の製作

の2点を実行するということになった。

映画製作の目的

1. 下呂営林署は東濃ひのきの産地であること。保養所を持った観光地にあることから、他局署や一般の見学者が多い。その人たちに短時間で効率的に下呂営林署を理解してもらう。
2. 東濃ひのきと下呂営林署のPRをする。

映画の内容

広報委員会では、終局的には、一般や学生に林業や森林の動きまで含めたPR映画にするということであったが、当面、素人でもあり、欲張らずに下呂営林署の特徴である東濃ひのきに絞って製作しようということになり、次のような内容となった。

1. 管内の概要

2. すぐれた人工林とその歴史
3. 事業のようす
4. 下呂営林署の経営

製作の経過と問題点

映画製作はもちろん、8ミリカメラを持つのも始めてのような状態で、撮し、つなぎ、音を入れただけの様なもので、映画とよべるような代物かわからないが、一応完成した。

撮影では、絵の長さとなレーションの長さを予想して撮ることは素人には無理で、絵の長さが間延びしたり、ナレーションが早口になってしまった。

録音では、撮影フィルムの手違いから音の入らない所が出たり、音のゆがみも出た。

そのため、始めのイメージと随分かけ離れたものができ上ってしまった。

今後、とり直し、録音のしなおしをして、改良していくつもりである。

さらに、東濃ひのきづくりだけでは不十分でもあるので、その点も改良したい。

おわりに

幸いにして、映画は削ったり、つぎ足したり出来るので“ここが知りたい”という意見を多くいただき、それを参考により良い映画にしようと望んでいる。